

「えーと」再考 ——談話運営という観点から——

“EETO Revisited”

小 出 慶 一*

1. はじめに

1.1 目的

本稿は、「えーと」¹の用法について検討し、対話データ、独話データに見られる用例をできるだけ包括的に捉えうる視点を見出すことを目的とする。また、「えーと」という語形の「と」に注目し、「と」を持つ形と用法との関係も併せて検討する。

筆者は、小出（2008）で、「えーと」について検討したが、この稿は、その不備を補足修正し、「えーと」の用法を再検討するものである。

1.2 問題のありか

小出（2008）では、先行研究の中でより包括的な記述をしていると考えられる定延・田窪（1995）を検討するところから考察を始めた²。定延・田窪の要点を挙げれば、「えーと」は、心的操作に手間のかかるものに遭遇した時、演算領域を確保するために、心的バッファを整理し、目的の心的操作（演算）を支援するものだ、ということになる³。

これについて筆者は疑問を呈したが、その根拠のひとつは、「えーと」は、「手間のかかる」操作をしている場合でなくても現れるということだった。その例として、自分の職業のような、

よく知っていて心的操作に「手間のかか」らない質問に答える際に出現する「えーと」の例を挙げた。

- 1 1： 小川さんでいらっしゃいますか。
よろしくお願ひ致します。（2：んん
っ）えっと、あーの、失礼ですけど
（2：はい）、お仕事は。
2： ええと、大学の教員をしております。
（T Om）⁴

しかし、この例が「手間がかか」らないものの例として適当だったかという点、必ずしもそうではなかったと思われる。応答には単に情報を述べるだけでなく、どのようにそれを述べるかという問題もある。演算・検索そのものではないが、その表現形式の形成には「手間がかかる」場合もあり、「えーと」はそのようなときにも現れないわけではない。その点では、例1の「えーと」も、定延・田窪（1995）らの捉え方の線上にあるものと見られないこともないからである。

しかしまた、定延・田窪（1995）は次のような例も挙げている。これらに関しては、心的操作という観点からだけで捉えるのはさすがに無理なように思われる。

- 2 [研究室で、電話を切った教師が、待っていた学生のほうを振り返りながら]

* こいで・けいいち
埼玉大学教養学部教授，日本語教育

ええと、で、君は、質問があったんだね。
(p.85)

3 客：また、明日来るから。

店員：ええと、明日は、定休日、店は閉まっておりますが。(p.86-7)

2 は待たせていた学生に対してその用件である「質問」を促すとき、3 は誤解をしている客にその誤解を正しつつ対応するときに現れる「えーと」であると説明されている。そして、3 については「慎重にいろいろ考えているという態度を表わすのに効果的であり、「発話のぞんざいさ・さしでがましさを回避」する (p.87) もので、一種の儀礼的な用法としている。ここでも、なんらかの心的操作のための予備的作業と「えーと」が対応するという捉え方で説明されている。

しかし、2 では、操作すべき内容、演算対象がない。2 の「えーと」は、場面切り替えのためのものと見るのが自然であろうし、心的な側面についていえば、相手の話を待ち受ける構えを作るといことぐらいであろうと思われる。

また、3 についても、「演算」をしているかのように振る舞うものと説明しているが、いくぶん無理があるのではないか。また、必ずしも儀礼と関係づける必然性はないと思われる。

このようにやや強引な説明になってしまうのは、演算領域確保という心内活動と「えーと」を関係づけようとするからであろう。確かに、心的操作との関連が推定される用法もあるが、演算や検索などの心的活動との関わりの弱い「えーと」の用法も存在する。

このほかにも、心的な操作との関係で捉えるのが妥当とは思えない用法が存在する。たとえば、次の例 4 のように、相手に話しかけるときに、「えーと」で始めることがある。

4 (ロールプレイの指示を書いた紙を「1」から渡され、話者「2」が読む場面)

1： (・・・) ちょっとこういうことで見てください。

2： はい。/// えーと、これ。

1： はい、で、あの一条件が、こう、一応こういう条件がださされていて、(2：はい) それで面接に行ってみる、という設定です。/// (W A f)

また、次のように、インタビューで、インタビューアーが新たな質問に切り替えるときに「えーと」を使うという用法もある。

5 1： ア、今尾さん (2：はい。) ですか。
はい、じゃ今尾さんと呼ばさせていただきます。

2： はい。

1： えっと今尾さんは、あの一、学生さんですか。

2： はいそうです。

1： えっと何を専攻してらっしゃいますか。(Y I m)

これらは、内容の処理に手間取っているために現れるものとは考えにくい。たとえば、4 では、「えーと」なしに、沈黙の後「これ」と言うとする、唐突の感が否めない。また、5 でも「えーと」を取り去ると、また別の効果を生み出す。つまり、「えーと」は、話し手の心内の状況にのみ対応しているのではなく、そこで行われている談話の運営⁵に関わる側面も持つように思われるのである。

このような点が、定延・田窪について指摘した疑問点だった。

そこで、小出 (2008) では、「えーと」の基本的な性質、機能を次のように考えた。⁶

6「えーと」の基本的な性質と機能(小出(2008)の説明)

「えーと」は、心内に発話に必要な情報、あるいは、表現形式が形成されていないことに気づき、その空白を埋めるために、情報あるいは表現形式形成のための心的活動に入ろうとする状態にあることを示すものである。また、それまでの心内の作業内容をクリアする機能も持つ。

この記述と定延・田窪(1995)との違いは、目的とする演算のための心的操作という観点を外し、ある行動からある行動へ移行するところに現われる空白、切り替えに伴う空白の認知との連動と考えた点にある。

しかし、この6の記述も必ずしも十分なものではなかった。それは、定延・田窪と同じように、心的な処理ということから離れて対象を見ることができなかつたからであろうと思う。「えーと」は、上に(例2, 4, 5)見たように、談話運営という観点から見たほうがよい性質も持っているのである。

確かに、定延・田窪も挙げるように次のような「えーと」の用法はありうる。

7 A: 236+97はいくつ?

B: えーと、・・・。(作例)⁷

ここでは、「えーと」は暗算を開始するときに現れている。「えーと」のあとには、もちろんこの場合、「計算」という心的な活動が続くわけである。がしかし、ここで見方を変えれば、「えーと」は計算という心的活動と直接連動するのではなく、計算という行為に切り替わる、その行為の切り替えという談話運営行動と連動すると見ることでもできるわけであり、また、そのように見ることによってしか、2のような用法は捉

えられないのではないかとも思われるのである。

1.3 新たな検討の視点

1.3.1 談話運営との関わり

以下、談話運営との関わりという視点から「えーと」の性格を検討するが、そのために、まず、ここまで挙げた、対話での「えーと」を整理してみる。「えーと」の出現するところは、次のようになる。これがすべてではないだろうが、『日本語会話DB』に現れる大部分の用法は、この中のどれかに当たるだろうと思われる。()内は用例の番号である。

- 8 ①計算や記憶の検索を開始するところ (7)
- ②プライベートな事柄、自己領域内の事柄について答えるところ (1)
- ③誤解に基づいた相手の問いかけや発話に対して答えるところ (3)
- ④インタビューアーが次々と質問をするとき、別の質問へ移るところ (5)
- ⑤相手の作業準備を待っていて、その準備が終わったのを見て、声をかけるところ (4)
- ⑥複数の相手と順番に話すとき、別の相手に移るところ (2)

これらは、談話での出現位置という外的な特徴に基づいて区分したものであるが、これを、「えーと」の前後がどのような関係になっているかという内容的な観点から見直してみると、次のように整理できよう。

- 9 a. 表現の内容や形式を形成するための作業に移る (①・②)
- b. 予想外の談話の流れを一時的に止める (③)

- c. 新たな話題へ移る (④)
- d. 停止していた談話の流れを再開する (⑤)
- e. 対話の相手をかえる (⑥)

この中で、いわゆる内容形成のための心的操作と関わると思われるのは 9a ぐらいで、そのほかのものは、談話全体の運営を行うためのもののように思われる。特に、9d や 9e は談話の運営そのものにかかわるもので、発話内容そのものとのかかわりは薄い。9b、9c は、内容との関わりを持つものであるが、しかし、内容そのものの操作と関わるわけではない。やはり、これも、談話の運営ということとの関わりが大きいように思われる。

また、定延・田窪 (1995) では、「対人インターフェースの一時的な遮断」という機能が挙げられていたが、「えーと」が対人的なインターフェースを遮断するように見える場合もあるが、逆に、9d のように、対人的インターフェースを再開するものもあるわけで、対話回路の遮断のみが「えーと」と関わるわけではない。

このように、「えーと」の出現は、定延・田窪の予想より広く、また談話運営というより上位の行動と関わりを持つものであると考えられる。「えーと」の現れる位置は、談話にとっての一種の転換点であり、それ以前の状態から別の状態へと移るところであると思われる。この転換点に現れるという見方は、山根 (2002: 105) でも指摘されている通りである。

その移行は、また、滑らかに繋がるものではなく、そこを越えるには、意識の転換、注意の転換のような心的資源の配分変更が必要であり、また、その配分変更のためのエネルギーが必要になるようなところではないかと思われる。このことと「えーと」の出現は相関しているように思われる (山本ら (1999) など)。

談話の中での移行というものも、さまざまなレベルのものがあると思われる。ひとつのストーリーの中での話の進行、話題の転換というようなものもある。これらの移行を談話内的なものとするれば、「えーと」は談話内容には踏み込まず、その外側にあつて、談話の運営や操作を行うという行動と連動しているものということになろう。行動一般を考えたとき、ある行動から別の行動へ切り替えることには、一定の心的なエネルギーが必要であり、新たな行動へ注意を向け直すことが必要であると思われるが、「えーと」はこのような言語外の行動との関わり、という広がりの中で捉えられるべきものだと思う。

1.3.2 「えーと」と談話プラン

「えーと」がこのような性格を持つものであるとして、さて、この心的資源の配分変更に関して重要なことは、その配分変更が、制約なしに恣意的に行われるのではなく、ある一定のプランのもとに行われるということであると思われる。次にこの点を見てみよう。

まず、呼びかけなどによって、談話を開始しようとする場合の例。

- 10 a. (商店で、奥にいる人に呼び掛ける)
{*えーと／あの一} すみません。
- b. (道で、財布を落とした人に呼び掛ける)
{*えーと／あの一}、もしもし。

10 a、b が発話される状況は、そもそもコミュニケーションの回路が開かれていない場合である。こういう状況では、まず回路を開く手続きが必要で、それがなければ話すこともできない。このようなところでは、「えーと」は使えないということ、10 の例は示している。「えー

と」は、「あの一」のような談話開始機能を持っておらず、すでに開始されている談話の中で働くものである。

では、コミュニケーション回路がすでに開かれている状況ではどうか。次の 11 は、すでに回路が開かれていると想定した場合の例である。

- 11 a. (会議で、議長の発言を遮って発言しようとする)
{??えーと／あの一} 議長、すみません、その件について・・・。
- b. (発表の途中で、時間係が、残り時間を告げる)
{えーと／?あの一}、残り 5 分です。
- c. (話し相手に、時間のなくなったことを告げる)
{えーと／あの一}、すみません、そろそろ出かけなくてはならないんです。
- d. (会議中、話し相手に、相手のネクタイが曲がっていることを注意する)
{*えーと／あの一}、ネクタイが曲がってますよ。

この例を見てわかるように、回路が開かれていても、また別の制約のあることが予想される。11 a-d の「えーと」の許容度には差があるが、その差を生むのは、その談話における、話者の役割、発言に関する権利であると思われる。

11 a では、談話の中で予定された発言ではない。緊急の場合には発言が許されるという、暗黙のルールに乗って発言を開始するものである。このような場合には、「えーと」は使いにくい。それに対して、11 b、c の話者は、その談話の中で、発言する権利を与えられている。11 b の話者は「時間係」という役割であり、残り時間に関する発言は公的に認められている。11 c で「えーと」が使えるのは、反対に、談話を中断する

権利が認められているからだと思われる。11 d のような場合に「えーと」が使えないのは、発言権があっても、話題と関係のない、服装についての話などのように、一定のプランのもとでの転換でない場合には使えないことを示すものである。

ここで使ってきた談話のプランという用語は、暗黙のうちに談話参加者の間に共有されている、談話の進行方向、参加者の役割など、談話の運営に関する約束事というような意味であるが、10、11 の例から、「えーと」がこれらの談話運営上のプランと深くかかわっていることが理解されると思う。

ここまでの検討をまとめると、次のようになる。

12. 「えーと」の出現についての仮説

「えーと」は、すでに開始されている談話回路の中にあつて、一定の談話プラン、談話内での役割認識に基づいて、談話行動プランを切り替えるときに出現するものであり、談話運営に関わる行動と連動して現れる。

2. 『日本語話し言葉コーパス』データに見られる「えーと」

2.1 独話データを見る目的

上の仮説は、主として、『日本語会話DB』の用例の観察に基づいて得られたもので、いわば対話データに基づく仮説である。他のタイプの談話行動に妥当するかはわからない。そこで、その妥当性を検証するために、次に、独話のデータを見てみることにしたい。対話データでは、対人的な要素に関わって出現しているという可能性もある。もちろん独話でも対人的な配慮がないわけではないが、談話の運営に関しては、

発話者が独占的に権限を持っているものである。したがって、独話に出てくる「えーと」と対話のそれを比べれば、対人的な要素がより限定的な用法がどのようなものが見られるはずである。そこで、以下に、独話において、「えーと」がどのように出現し、どのような機能を果たしているかを見てみたいと思う。

データとしては、国立国語研究所(2008)『日本語話し言葉コーパス』(以下、『話し言葉コーパス』)に収められたデータのうち学会発表データを用いる。

2.2 学会発表データにおける「えーと」の出現位置

まず、対話データについて行ったのと同じように、『話し言葉コーパス』についても、「えーと」の出現位置を見てみる。すると、次のようになる。

- 13 ①発表を開始した後、本題に入るところ
- ②発表の終結部分に移るところ
- ③発表の途中で、機器を操作する、図表を指すなどの行動に移るところ
- ④引用の読み上げなどをするところ
- ⑤難しいあるいは慣れていない用語と思われる語を使うところ
- ⑥補足的な情報を加えたり、補足説明などをするところ

これらのそれぞれについて例を挙げ、若干の説明を加える。

2.2.1 ①発表を開始した後、本題に入るところ

『話し言葉コーパス』に収められた発表では、話者の名乗りから始まるものが多くみられる。14 a、bの例で、(R×)などと表記されているのがそれである。本題に入る前に、別の前置きが来る例もあるが、いずれにしても、本題の開始

位置に「えーと」が現れることは多い。「えーと」がほとんど現れない話者でも、このように、本題に入るところでは出現している例も数件あった。

14 bのように、談話そのものの開始部分にも出現する場合があるが、これは、何らかの身体行動に引き続き名乗りに移行する、というような文字化されていない非言語文脈がその前に存在しているものと想像される。

14 a. (F えー)(R×)でございます。(F えーっと)

今(F あのー) L:<雑音>国際(D ひひ)比較の(F えー)お話がありましたけれども (ID:A07F0844) ⁸

b. (F えっと)(R ××)ですよろしくお願ひいたします。<雑音>(F えーっとー)(F あの)早速発表に入らせていただきますが(F えー)本日は(R ××××)という題名で (ID:A02M0076)

2.2.2 ②発表の終結部分にうつるところ

次は、終結部に現れる「えーと」である。15 a、bでは、明示的な終結宣言(「発表は以上です」という発話)への移行ポイントに置かれている。

15 a. 文献資料への目配りというものが(F えー)求められるのではないかと(F えー)考えます。<雑音>(F えーっと)発表は以上です。(ID:A02M0076)

b. (F えーっと)発表は以上です。(ID:A01M0007)

2.2.3 ③発表の途中で、機器を操作する、図表を指すなどの行動に移るところ

16 a、16 bは発話の内容から、「図」や「表」を指示していることがわかるが、「えーと」は、

その指示する行動と連動しているものと推測される。『話し言葉コーパス』の音声データを聞くと、16 a では、「えーと」の周辺に停滞があり、地図を示すなどの動作をしていることが窺われる。16 b でも同様である。⁹ 16 c でも、「こういう風な」という部分で発話速度が落ちている。それは、発話中には言語化されていないが、何かを提示しながら説明しているためであろうと推測される。

16 a ~ c の例では、談話の途中で談話以外の行動が挿入されているわけであるが、その挿入が行われる個所と「えーと」は連動していると考えられる。

16 a. (話の中で、「地図」を指し示す)

これは<咳>(F んー)(F ま) (D こ)細かいことを申しても何ですが、これは(F あの)ハワイの(D ホ)ホノルル(D う)の(F あの) (D え)絵です。<雑音>(F あの)(D しゃ)<FV>図です。それで(F あのー)(F えーと):<雑音>はい(D はし)もう付いていた(F えっと)(D こ)ここがこれがオアフ島ですが(F あのー)ホノルル(D2 は)
(ID:A07F0844)

b. (話の中で、「表」を指し示す)

これに従ってここでは(M とか)に続く動詞とその頻度を調べました。(F えーっと)表一を見てください。(F えっとー)表一によりますととか表現の総数百二十に後置する動詞の中で (ID:A06F0028)

c. 先程述べたような<雑音>尤度(D くさいでげ)動的特徴量を考慮して尤度最大化基準でパラメーター系列を生成すると(F えーと)こういう風な<雑音>ものになる。
(ID:A01M0007)

2.2.4 ④引用 (読み上げ) などをするところ

17 a では、『話し言葉コーパス』のスキプトに【 】で注釈が付けられており、そこが「読み上げ」部分であることが示されている。そして、読み上げの開始ポイントに「えーと」が現れている。17 b も、メモなどを読み上げる、その開始位置に「えーと」が現れる。17 b の(M 何とかはそうだったよね)は引用を読んだものであり、次の「誰さんと誰さん」も、引用口調で読まれている。

引用というのは、それまでの行動とは別種のものであるという意識が働いているために、「えーと」が現れているのだと思われる。

17 a. (引用を読むという行動を始めるところに出現)

外国旅行中に起きたハプニングについて話をしている場面です。(F えーっと)

【%TYPE=O_SIT 本転記基本単位からID=0171 まで読み上げ】友達凄いショック受けてて (D す)そりゃそうだよそんな払うからだよとか言って 0171 00569.693-00571.427 L:】そうだよ言ったんだけどね【0172 00572.672-00573.148】というちょっと読んでみました。
(ID:A06F0028)

b. で第二点に(F え)例五では(F えーとー)(M 何とかはそうだったよね)や誰さんと誰さんという言葉を使っているところからも分かるように (ID:A06F0028)

2.2.5 ⑤難しいあるいは慣れていない用語と思われる語を使うところ

18 a では、「音素境界」というさほど一般的とは言えない用語の前に停滞があり、そして「えーと」が現れている。また、(F と)は「えーと」も聞こえるが、これは④の「えーと」に近く、

この部分にはページを繰る音が入っていて、ページを繰るといふ動作をしながら(F と)と言っているものと思われる。したがって、この「えーと」は動作の挿入ということ連動しているものと見るができるだろう。

18 bは、言いなおしの前に「えーと」が現れる例であるが、これは、代読という特殊な事情によるものと思われる。18 a、bは同じ発表者によるものだが、本来の発表者の代理で原稿を代読しているものである。その分、原稿に一種の読みにくさがあるのだろう。それが、18 bで、読み間違えの訂正という形で現われたのだと思われる。

このような、自身の発話のモニターによる間違いの発見、その訂正という行動は、本筋の談話とはまた別の行動という性格を持っているわけである。

18 a. で(F と)実験の手続きですがここでは(F えー)恒常法を用いて(F えーと)音素境界値を求めました。(ID:A01F0122)

b. 被験者群によるピッチパターンの効果の差は見られませんでした(F えーと)(D り)見られませんでした。(ID:A01F0122)

2.2.6 ⑥補足的な情報を加えたり、補足説明などをするところ

19 a、bでは、補足的な情報(_____で示したところ)を挿入するところに「えーと」が現れている。19 aでは他の話者の発話を補足的に引用するところ、19 bでは他の話者の話と関連付けを行おうとするところに現れる。これらの発話は、同じ場で行われた談話への言及であり、言及対象への敬意、聴衆との共感を表現しようとする方略とも考えられる。つまり、内容的に必須の情報補足ではなく、その場での出来事の検索、照会などの別種行動が行われるところで

あるために、「えーと」が出現しているのではないかと思われる。

- 19 a. 日本語の文法的認知的そして語用論的機能に(F え)どのような影響を与えるか
(F えーと)午前中の(F あ)(F えーととー)(R ××)先生と後昨日の(D ひ)(R ××)先生のお言葉を借りれば (ID:A06F0028)
- b. (前の話者の話の内容への注釈的言及)
(F えーと)今(F あの一)国際(D ひひ)比較の(F えー)お話がありましたけども
(F えーと)その中で今の話にもありましたように(F あの一)(F その)(F あの一)日本人と(F えー)外の外国との比較(F う一)(F うー)<FV>中としてのハワイ調査ということ(D2 を)で うんそこを少しお話を(D(? す)) (ID:A07F0844)

2.3 「えーと」の性質

—独話データの観察から—

ここまで、学会発表データにおける「えーと」の出現位置について見てきた。これらの用例を踏まえ、12に述べた仮説についてもう一度見直してみたい。そのために、ここに挙げた「えーと」の出現位置を、談話運営との関係という観点から整理してみる。すると、次のような区分が得られる。

20 a. 談話のステップ移行と連動するもの

(①、②)

b. 進行中の談話に関わりつつも別種の行動への移行と連動するもの (③、④)

c. 談話中のトラブル処理への移行と連動するもの (⑤、⑥)

このようにまとめると、9に示した対話データでの「えーと」とは談話内で異なる性格を持

っているように見えるかもしれない。独話データでは、いわば直線的な流れの中に現れる移行ポイントに「えーと」が現れており、当然のことながら、対話運営に関わる移行（たとえば、話し手の交代、話題への割り込みなど）のようなものは見られない。しかし、全体として見た場合、談話の内容的な面への関わりを持たず、また、談話の運営に関わるという点において、共通した性格を見せていると思われる。

20 a では、談話の本題の開始部、それから終結部での出現を、「えーと」の出現位置の中で特徴的なものとして挙げたが、前置きのものから本題へ入って行くところ、談話を終結させて、その終結を宣言するところは、談話運営上、大きな心的資源あるいは心的な構えの転換をするところで、単に話題が「はじめに……。次に……」と展開していくところとはまた別のエネルギーを要するところなのかもしれない。談話の局面の推移は、行動的なものなのであり、その証拠に、単に話題内の発展とみられるような部分では、「えーと」はほとんど出現しないのである。

20 b は、「えーと」の性質をよく示すもので、談話中に挿入される、物理的な行動の開始部に現れるものである。発表中、スクリーン上の地図を指して「えーと、ここですね、これがハワイです」というように言われるとき、「えーと」は、それまで談話内容に向いていた意識を地図の方へ、方向転換をさせるわけである。また、機器操作の際、電源の場所を探しながら「えーと、電源は……」などと言う例もあったが、「えーと」は、談話の内容にかかわるのではなく、そこで行われる行動に関わっているのである。

20 c は、談話を運営していく上で問題が生じたところに「えーと」が現れるということで、「えーと」の出現と問題への対処とが連動していることを示すものである。

このように見てくると、基本的には 12 に述べた仮説はさほど変更する必要がないように思われるが、ひとつ修正するとすれば、談話プランの切り替えだけでなく、談話運営上の問題に対処する、あるいは、談話中に挿入される談話外行動への切り替えを行う際に、そのような行動と連動して現れるものだ、ということであろう。また、その背景に、新たな行動のための心的資源の配分変更ということがあり、「えーと」の出現は、それと連動するのだらうと思われる。プランの切り替えというだけでは不十分で、談話中の問題への対処のための意識の切り替えというところが重要だらうと思われる。12 の仮説を修正するとすれば、次のようになるろう。

21. 「えーと」の出現についての仮説（12 を修正したもの）

「えーと」は、すでに開始されている談話回路の中にあって、一定の談話プラン、談話内での役割認識（発話権の所在など）に基づいて談話を行っている際に、談話プランの切り替えをしたり、また、談話進行中に談話の場で生じた問題への対処などのため、意識を向ける先を変更する必要が生じた場合に、その意識の切り替えという心的な動きと連動して現れるものである。

3. 「えーと」の性質の由来

次に、「えーと」がなぜこのような性質を持つにいったのかを考えてみたい。フィラーには、「やっぱり」「まあ」「もう」あのー」など、自立語に起源を持つものもあるが、「あー」「えー」など、由来となった語を想定することが難しいものもある。その中で、「えーと」は中間的な位置を占めている。それは、「えーと」が特定の自立語から派生したものとは考えられず、しかし

また、母音延引フィラーとも異なる性格を持つという点である。このような語彙的な性格と、その談話上の性格の関連については、小出(2008)で触れることができなかった。この点について、ここで検討し、改めて、「えーと」の独自性は何によって生じたかを考えてみることにしたい。

「えーと」の性質を考えるため上で重要なことのひとつは、「と」という形式の働きだろうと思われる。それは、「と」を持つフィラーに、特徴的な性質が認められるからである。この点について、2つの方向から考えてみる。

まず、フィラーの中には、「～と」が付くものと付かないものがある。「と」が付くものと付かないものを挙げると次のようになる。

22. 「と」が付いた形を持つフィラー

付くもの : えーと、うーんと

付かないもの :

(派生系)*あの一と、*こうと、*まあと、
*もうと、*やっぱりと、

(母音延引系)*おーと、*あーと¹⁰

「と」が付くものは、他にもあるかもしれないが、代表的なものとして「えーと」「うーんと」の2つがある。「うーんと」についての検討は別稿に譲りたいと思うが、例を挙げると、次のようなものである。

23 a 2 : 早朝、うん、しかも、／曜日が多いですね。土日、(1 : うん) 火水木、(1 : はい) /うん、早朝は構わないんですけど、(1 : はい) こん、だけ、日にちが入るんでしたら、(1 : うん) /うんと、時給 500 円でいうのは、(1 : はい) あまりにも安すぎると。(R T m03)

b 1 : えーと、ただあとあの一、あの通勤手当は出ないんですけども、(2 : はい。)あの一、うーんと、皆勤手当てと(2 : はい。)それから曜日が多くなればそれであの、歩合で、あの一、そこに、え、30 パーセントぐらい加算されますから、あの全体からすれば決して悪くない、値段になる、と思います。(K N m03)

「えーと」と同様に、「うーんと」も、談話の内容評価や表現形成というようなものとは連動していない。連動するのは、進行中の談話の運営ということだと見ることができるだろう。

それに対して、「と」が付かないフィラーの場合、その背景にあるのは、発話時の発話内容についての姿勢であり、内容の由来、内容への評価、形式の探索などの活動と連動する。小出(2008)で扱ったもののうち、3 つほど例を挙げれば次のようになる。例を「 」で示す。

24 a. 「あの一」: 後続の発話内容の源泉、由来がどこにあるかの認識にかかわるもの

「あの、じゃあちよつとあの話を変えてね、・・・」(W A f)

b. 「まあ」: 後続内容の暫定性の表示、断定的評価の回避にかかわるもの

「まあ本を読んだりとか、まあ、映画を見たりとか・・・」(T S m)

c. 「こう」: 後続内容中の対照のカテゴリ名の探索と連動するもの

「まいろいろな東京都内を、こう散歩したりとか・・・」(C J f)

これらに対して、「えーと」「うーんと」は、上述のように、内容にはかかわらず、発話時に生じた談話行動上の要請、談話外の要素への対

応、談話上のトラブルの処理などと連動して現れるものである。

この観察が妥当ならば、「と」が付くものと付かないものには明確に性格の違いがあり、「と」が付くことと、談話運営上の行動を行うということが相関するわけである。それはなぜなのだろうか。

このことを見る前に、フィラーの文法性について別の現象を見ておきたい。それは、「～ね／ですね」という形式が付くかどうかということである。この「ね／ですね」は、間投助詞とも呼ばれるものであるが、フィラーの中にはこれが付くものと付かないものがある。

25. 「ね／ですね」が付くか

付く : えーと¹¹、あの一、で、やっばり、ちょっと、うーんと¹²

付かない : えー、うーん

「ですね」が付くか付かないかは、その形式が、日本語の語彙として認知されているかによっているのではないかと思われる。「えー」や「うーん」などに「ですね」が付かないのは、これらの“語”がこの段階では語として未分化な段階にあることを示すものであり、それに対して、「あの一」「ちょっと」などは、自立語から派生したフィラーでもあり、語として扱われているということではないか。そして、「えーと」も語（あるいは句）としての地位を与えられているということになるのではないかと思われる。「えー」と「えーと」の違いはこの“語としての確立度”というところにあり、この見方が妥当なら、その違いを生むのは「と」の働きということになる。

ただし、「ですね」が付くかどうかには、もうひとつの条件がある。語としての確立度とはまた別の条件である。自立語の中でも、「はい」「へ

え」「なるほど」などのいわゆる感動詞類には付かないし、「あつ」などの反応詞にも付かない。これらの語は、それだけで「文としての資格」¹³を持つものと言われるが、完結した表現となっているものには付かないわけで、その点では「えーと」はそれのみでの完結性というものは持っていないことになる。その点からすれば、「えーと」は、感動詞類とは異なる性格を持つことになる。

つまり、「えーと」は句としての資格を持っているが、それだけでは文としての完結性は持たないということである。「えー」と比較した場合、このような性格を持つようになったのは、これまた「と」の付加によるということになろう。

では「と」は何をしているかと言えば、「と」は、終助詞的に使われた場合、ある連続的な意識の流れの中に、一時的な停止点を作り出す働きがあるように思われる。次の例を見てみよう。26・27を比較すると、26 a、27 a は、そこで表現は完結し、その対象にかかわる意識の流れも完結している。それに対して、26 b、27 b は、発話は一応終了したが、行動プランとしての完結には至っていないということが含意されている。まだ終わっていない部分への意識が働いていることが示されている。

26 a. これはこれでいい。

b. これはこれでいいと。

27 a. さあ、できた。

b. さあ、できたっつ。

「えーと」においても、「と」が付加されることによって、この“一時停止性”とでもいうべき性格が加えられたのではないかと考えられる。

「と」によって、それまでの談話行動を停止させ、注意の再配分を行うことを可能にしたのではないかと思われる。

また、「えーと」や「うーんと」は、それ自体は26a、27aのような命題内容に相当するものは持っていないわけで、「と」は、「えー」や「うーんと」という連続体に区切りを与え、その談話時点で一時的な停止を与える働きをしているのではないかと思われる。

このように考えると、「えーと」の談話運営の中での出現が、「と」という要素の付加によって可能になっていることが理解されるのではないかと思う。¹⁴

4. まとめと課題

以上の検討をまとめると次のようになる。

1) 「えーと」はどのようなところに出現するか

「えーと」は、すでに開始されている談話回路の中であって、一定の談話プラン、談話内での役割認識（発話権の所在など）に基づいて談話を行っている際に、談話プランの切り替え、そこで生じた問題への対処などのため、注意を向ける先を変更する必要が生じたところに現れる。

2) 「えーと」はどのような心的な活動と関わっているか

注意を向ける先を変更するという心の動きと連動して現れる。

3) 「えーと」は、なぜ、このような心の動きと連動するようになったか

「と」は、何らかの連続的な内容や行動の中であって、そこまでの流れを一時的に停止させる機能を持っている。この性格によって、連続している談話の中に停止を作り、注意の配分変更を可能とする余地が作られた。

4) フィラー体系化の観点

「えーと」の検討によって、フィラーを見る観点として、コミュニケーション回路の開始、談話運営との関わりという視点を得た。

このような視点を得ることによって、「まあ」「あの一」などの自立語由来のフィラーが、発話内容に関わるのと、大きく性格の異なるフィラーのあり方を捉えることが可能となる。

5) 残された問題

残された問題として大きな点は、この稿で仮定した“心的な資源の配分変更”ということが、実際にヒトの心的生理的な変化とほんとうに対応しているのか、対応しているとしたら、どのようなメカニズムによっているかなど、身体的な変化との関連付けということであろう。また、このことは、フィラーというものの性格を追究するために欠かせないことでもある。

<注>

- 1 「ええと」「えつーと」などいろいろな形があり、また、スクリプトでも様々な表記がなされるが、本稿ではその代表形として「えーと」と記す。
- 2 分類しか示されていないが、森山・張 (2002) でも、「えーと」は「広義思考中表示」の中の「探索中表示類」の一つとされている。定延・田窪 (1995) と同じ方向で「えーと」を捉えていることになろう。
- 3 「談話中に必要となる心的操作（たとえば検索や計算）の中には、けっこう手間のかかるものがある。話し手がこれをおこなう際には、話し手の意識を小容量の心的バッファから大容量の心的データベースに戻すことによって演算領域を確保する（つまり心的バッファを占めている様々な情報を一時「頭の片隅」において集中力を高める）という、検索や計算などのための予備的な心的操作が必要になることがある。『ええと』は、話し手がいったんこの予備的な心的操作に入っていること（入りつつ、当該の検索や計算をおこなっていること）を表わす。『ええと』を発話することによって、話し手はこの演算領域確保操作を通じて、目的となっている当該の検索・計算操作を明確化でき、支援できる。（結果として、特に聞き手が存在する場合、『ええと』は話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時遮断する宣言として働く。）」（pp.78-79）
- 4 (T Om)などと引用末に書いてあるものは、『インタビュー形式による日本語会話データベース』（北九州市立大学）（以下、『日本語会話DB』）からの引用で、（ ）

内はデータ名である。また、「えーと」も太字・下線は筆者による。

- 5 定延・田窪(1995)は、談話管理という用語を使っている。この稿で考えている談話行動全体の管理、コントロールという行動を指す用語として、この稿でも談話管理という用語を使ってもいいのであるが、定延・田窪(1995)は、その規定をしていない。そこで、混乱を避けるため、この稿では「談話運営」という用語を使う。
- 6 小出(2008)で複数の項になっていたものをまとめた形で示す。また、ここでの議論に不要な部分は除いてある。
- 7 以下、出典を示さない用例は作例。
- 8 用例末の()内の記号は、『話し言葉コーパス』での分類番号である。また、『話し言葉コーパス』では、句読点は打たれていないが、この稿では、常識的に文の終止と考えられるところに句点を打った。ただし、読点は打っていない。また、そのほかの表記に関しても、原文のままである。
- 9 16 a、b で指示動作をしていると思われる個所に、下線を引いた。
- 10 派生系とは自立語から派生したものの、母音延引系とは「それは、あー」の「あー」などのように、前の句の最終母音が延引されたものを指す。
- 11 「えーとですね」の例を挙げれば次のようなものである。
 - 1 : (….) これで、よろしければ、あの、すぐ、始めていただきたいんですが。
 - 2 : そうですか。(1 : うん) ええっとですねー
(1 : うん) えー主にこれ夜の一お仕事ですよねー。
 - 1 : はい。(SKm)
- 12 「うーんと」については、「うーんとね」という形はあると思われるが、「うーんとですね」という形が使われるかどうか、待遇性の面で「うーんと」と「ですね」の間に齟齬があるようにも思われる。また「うーんとですね」という用例もなかった。実際の使用という点では、「～ね」のみが付くという偏りを持っているのではないかと思われる。
- 13 山田孝雄(1908)以降、この規定が感動詞の規定として一般化している。その妥当性については別稿で論ずることにしたい。
- 14 小出(2008)では、この「と」について、「えーと」は、「と」が加えられることによって、「えー」という対他的な性質のフィラーから、その対他性を消去し(あるいは、弱め)、話し手の内部で行われている処理に目を向けさせるフィラーへと変容させられている」とし

たが、「対他性」は現象であって、本質的なことではないかもしれない。

<参考文献>

- 小出慶一(2008)「現代日本語における語の意味・用法の広がりに関する研究」埼玉大学学位論文(未公刊)
- 定延利行・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構——心的操作標識『ええ と』と『あの(一)』——」『言語研究』108 : 74-93
- 森山卓郎・張敬茹(2002)「動作発動の感動詞『さあ』『それ』をめぐって—日中対照的観点も含めて—」『日本語文法』2-2 : 128-143
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- 山本敏行・鈴木泰三・田崎京二(1999)『新しい解剖生理学改訂10版』南江堂

※この研究は、日本学術振興会科学研究補助金(基盤研究(C)、課題番号19520444)を受けて行われた。